

和文誌「地球環境」投稿規定

1. 投稿資格

本誌への投稿は会員を原則とする。ただし協会が寄稿を依頼した場合はこの限りではない。また、外国からの投稿は編集委員会の判断により非会員であっても認めることがある。

2. 投稿原稿の種類

投稿原稿の種類は、「解説」、「総説」、「書評・紹介」等とし、すべて和文とする。

- 1) 解説：主要な会議の結果報告と研究プロジェクトの解説等。
- 2) 総説：研究プログラムの研究成果等。
- 3) 書評・紹介：地球環境研究に関係のある図書についての批評・紹介。

「解説記事」と「総説」には摘要をつける。

3. 原稿の校閲

編集委員会は、受け付けた原稿の校閲を複数の専門家に依頼する。その結果、内容・体裁に問題があると判断された場合にはその旨を著者に伝え、修正を求める。修正を求められた原稿は3ヵ月以内に再投稿することとし、3ヵ月を過ぎれば新規として扱う。受理できないと判断された原稿は、理由を明記して著者に返送する。細部の体裁については、編集作業の段階で編集委員会が手を加える場合がある。

4. 原稿の長さ

「解説」と「総説」は図・表、摘要を含めて刷り上がり12ページ以内とする。「書評・紹介」は刷り上がり2ページ以内とする。この制限ページの超過分や多額の経費を要する図表の実費は著者負担とする。

5. 原稿のまとめ方

原稿は執筆要領に従い、完結にわかりやすく書く。原稿は、摘要、本文、注、文献、図・表の説明の順にまとめ、原本と全部のコピーを2部（計3部）必要とする。図・表には一枚ずつ片隅に氏名を記入すること。

6. 原稿の送付

本協会所定の送付状に必要事項を記入し、原稿に添付し簡易書留で国際環境研究協会宛郵送する。

7. 原稿の返却

原稿は著者に返却しない。ただし、図・表・写真については、投稿時に申し出があれば返却する。

8. 校正

掲載が決定した原稿は、初校のみ著者に送付するので、速やかに校正し指定の期日までに返送する。著者校正時における文章や図表の追加・削除・変更は認めない。

9. 別刷

別刷入用部数は、50部を無料とし、さらに必要な場合には50部単位にて著者負担で申し込むこととする。

10. 送付状

作成した原稿と投稿規定および執筆要領とを入念に照合のうえ、送付状の裏面の注意事項を参照して送付状の必要事項を記入し、枚数など原稿と相違ないことを確認したのち、原稿の表紙の前に添付する。送付状は、本紙に綴じ込まれている。

11. 著作権

本紙に掲載された原稿の著作権は協会に帰属する。また、原稿の文責は著者にあるものとする。

12. 編集委員会への紹介

投稿に関する編集委員会への紹介は切手付き返信用封筒を添えた郵便によることとする。

和文誌「地球環境」執筆要領

1. 表題

原稿の内容の最も適切な要約であるようにする。

2. 原稿用紙と文字

原稿は400字詰め横書き A4 判原稿用紙に楷書体で、黒か青のインクまたはボールペンで書く。和文ワープロを使用する場合は、A4 用紙を用いて横22字縦24行とする。

数字および欧語等は原則として半角とする。

3. 摘要とキーワード

「解説」と「総説」には、800字以内の摘要と5語以内のキーワードをつける。摘要の記述方法は本文に準ずる。

4. 原稿記載の順序

第1ページは表題、著者名、摘要、著者の所属機関（または連絡先）を書く。第2ページ以下は、本文、注、謝辞、文献の順に書く。

5. 本文

(1) 文章は口語体とし、現代かな遣い・常用漢字を用いる。外国語は原語表記を原則とするが、原語によってはラテン文字化を必要とする場合がある。

(2) 数式は上下に1行ずつあけて明瞭に書くこと。

(3) 注はなるべく用いないこと。

(4) 略語を用いる場合、原則として初出時に完全名を以下の例に従って書くこと。

環境庁 (Environment Agency, EA)、環境庁 (EA)

Environment Agency (環境庁, EA)、Environment Agency (EA)

(5) 章はアラビア数字の連続番号で、節は章の番号と一緒に用い、1.1のようにする。項は括弧付きのアラビア数字(例:(1))を用いる。

(6) 図と表の本文中の引用は、それぞれ図1、表1のようにする。

6. 注

脚注が必要な場合は、本文の当該箇所の右肩に一連の番号をアスタリスク付きの番号でつけ(例:~である*1。)、本文の最後に番号をつけてまとめる。

7. 文献

(1) 本文中の引用は、以下の例にならって行なう。また、外国語雑誌等からの引用の場合、著者名は原語表記のままとする。

吉野¹⁾は、吉野・田中¹⁾は、吉野ほか¹⁾は、

Webster and Yang¹⁾は、Webster *et al.*¹⁾は、

(2) 文献リストは、本文中に引用したもののみについて、そのすべてをまとめ、著者名は略さずに全著者を記す。ただし、雑誌名を公称ないし慣用に従って省略することは差し支えない。

文献の配列は引用番号順にする。

例：

1) 不破敬一郎 (1983) 環境科学研究の現状と課題。化学と工業、36、366-370。

2) Fisher, A. C. and F. M. Peterson (1976) The environment in economics: a survey. *J. Econ. Literature*, 14(1), 1-33.

3) 中馬一朗・江上信雄・式部敬 (編) (1984) 環境と人体III: 窒素酸化物。東京大学出版会、297pp。

4) Odum, E. P. (1986) Introductory review: Perspective of ecosystem theory and application. In N. Polunin (ed.), *Ecosystem theory and application*. John Wiley & Sons, Chichester, 1-11.

5) 海老瀬潜一 (1981) 震ヶ関流入河川の流出負荷量変化とその評価 (陸水域の富栄養化に関する総合研究、5)。国立公害研究所報告、21、130pp。

8. 活字指定

見出し等の活字指定は編集者に一任する。文中でのイタリック指定は下線(_____)、ボールドもしくはゴシック指定は波線(~~~~~)とする。

下付および上付には、朱で△▽を入れておく。

- 動植物名はカタカナ書きとするが、学名はイタリックとする。
- 物理量および変化するものを表す欧字はイタリックとする。
- 添字が物理量あるいは番号に対応する場合はイタリックとする。ただし、添字が言葉の意味を表す場合は立体とする。
- 単位は原則としてSI単位を用い、立体で表す。
- 本文中、ボールド体は慣用の場合および数式や記号などやむを得ない場合に限り用いる。

9. ページ

原稿には、摘要から文献まで一連のページ番号をふる。

10. 図

本文中での掲載場所を指示するために、その図が出てくる箇所の右横欄外に「図1挿入」などと朱書きすること。

- 図はカラーとし、そのまま製版に使用できるものとする。原図が白黒の場合、各部の色の指定を行なうものとする。原図が白黒で色の指定がない場合は、編集者により色の指定を行なう。
- 縮尺について特別の希望がある場合は、その旨を記載する。
- 写真はプリントした陽面を用いる。
- 図のトレースを本協会に依頼する場合、あるいは提出したトレースが不完全でトレースを仕直す場合には実費を申し受ける。
- 写真、図が多数のときには、製版費用の実費を申し受けることがある。

11. 表

- (1) 表の内容は整理・加工・集約化したものとし、生のデータを載せることは避ける。
- (2) 表の形式はできるだけ簡単にし、表中の小数点は縦にそろえる。
- (3) 本文中での掲載場所を、その表が出てくる箇所の右横欄外に「表1挿入」などと朱書きすること。